



みことばの光に照らされて

主任司祭 頭島 光 神父

新年明けましておめでとうございます。

新しい年 2018 年が始まりました。昨年、いただいた神の恵みに心から感謝しながら、本年もよろしくお願ひいたします。私たちが掲げたテーマ「共に暮らす家を大切に」は今年も続けます。このテーマで私たち

谷山共同体がさらに一致し、一步でもみ言葉に近づけるよう努めましょう。ご降誕のとき羊飼いたちは「飼葉桶に眠る幼子を探し当て」(ルカ 2:16) しました。私たちも信仰者の一人としてその新しい一步を印しましょう。

◆「家族は一つ」

聖書は創世記の初めから家族物語で始まります。アダムとエヴァは私たちと同じ家族でした。しかし、その始めは傲慢と暴力に満ち、悪意に満ちた神の拒絶と人間世界の否定でした。こうして聖書の終わりに「花嫁と小羊の婚宴」で幕を閉じます。つまり、散り散りにされた家族は主の元にもう一度、一つ所に集められるということです。これが聖書の結末です。大切に育てた結果、その実りとして、一つにならない家族はありません。黙示録には次のように言われています。「来てください」(黙示 22:7)、「私はすぐに来る」(黙示 22:20) と。



クリスマスミサより

人は家の中に入る時、燭台の上に置かれるともしびを頼りにしています。イエスの時代、ユダヤ地方の家は明かり窓があるくらいで、日中でも部屋の中は暗いからです。だから燭台の上に置かれた灯は大切なのです。灯は神の福音であり、部屋全体を照らし出します。

それと同じように、私の心も神のみ言葉に照らされて初めて光り輝くものです。み言葉は聖書の研究や学問を通して捉えられるものでなく、心で感じ取り、信仰の耳で聞き取り、体で味わって初めて、イエス様ご自身と出会う場、そのものです。「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタ 4:4) と言われている通りです。

◆「私たちの家」

イエスは「二つの家」の例えを語りながら(マタ 7:24 以下)、私たちに「み言葉を聞く」人となるように教え諭されます。言うまでもなく、「砂の上」に建てられた家は、み言葉を聞くには聞くが実行されないの、様々な苦難が押し寄せると急に弱腰になって倒れてしまう人のこと。しかし、岩の上に家を建てた者は土台がしっかりしているの、どんなに恐ろしいことが降りかかっても、耐え抜く力があるのです。その土台はまさに信仰の礎ともいべき堅固な岩なのです。

◆「燭台のともしび」

◆「食卓を囲む」

ミサはくみことばの食卓>です。キリストのご聖体を頂点にしてミサは構成されますが、その頂に到達するまでの間に、み言葉の朗読を聞きます。こうしたみ言葉の典礼に預かるとき、私たちは神の「みことばの食卓の座」についているのです。文字通りみ言葉をいただいているのです。み言葉を食べるわけですから、お腹が満たさるように、心は喜びに満ち溢れるはずで、一つの家族が仲睦まじく食卓を囲む様子は微笑ましいものであり、暖かさを感じます。なぜなら言葉以上に神の愛と喜びに満ち溢れているからでしょう。

1月 1日(月) 00:00と10:00 元旦ミサ 新成人の祝福、車、餅等の祝別があります。

7日(日) 9:00 ミサ / 11:30～ひまわり幼稚園七草祝い
21日(日) 9:00 ミサ後 役員会
28日(日) 9:00 ミサ後 司牧評議会

以上は先月号にも載せていましたが、以下追加です。

1月4日(木) 典礼委員会

1月5日(金) 初金ミサですが、午後15:30～ノイマン記念ミサ

1月13日(土) 14:30～教会学校始業式

1月14日(日) 9:00 ミサで入門式があります。

1月18日(木) からキリスト教一致祈禱週間が始まります。

1月21日(日) 14:00～信仰一致祈禱集会(加治屋教会にて)

1月22日から25日まで司祭大会(22日から25日までミサなし)

今月の聖人から

エリザベス・シートン

1月4日



アメリカ人として最初に列聖されたエリザベス・シートンは、1774年8月28日に生まれた。義兄はバルティモアの司教になったが、彼女の家族は殆どがプロテスタントであった。エリザベスは20歳で結婚し、活動的な慈善家となって、1797年に幼児を抱えた貧しい未亡人たちを助ける会の設立者の一人となった。1803年、彼女の夫は5人の子供を残して亡くなった。

2年後、彼女がカトリックになった時、バルティモアの聖マリア神学院の院長が学校を始めるように依頼したが、これがアメリカにおける小教区学校のカトリック組織の始まりとなる。

1809年にエリザベスは聖ヨゼフ会という新しい修道会を創立するために4人の友人を集め、その後メリーランド州エミツバーグの近くに貧しい子供たちのための学校を開いた。

1812年までに小さな共同体のメンバーは19人となって正式な修道会として承認され、エリザベス・シートンが最初の長上となった。彼女が修道女として請願を立てたのは1813年であった。彼女の理想は各地に広まり、彼女が天に召されたときには、24の修道院が設立されていた。

Taniyama CC NEWS



クリスマスおめでとうございます。

クリスマス・イヴ(24日、主の降誕夜半のミサ 19:00)には例年通り沢山の信者さんが集まりました。今年は聖アルフォンソ合唱団のモーツァルトのミサ曲 KV220が奉獻され、お祝いに華を添えました。ミサ後、信徒会館ホールでは茶話会になり、プレゼントも配られて素晴らしい一夜を過ごしました。⇒



ムイベルガ神父のアンテナ



クリスマス-神の新しいイメージ

色々な宗教の神話を読むと、神はいつも優れた偉大な力を持っている方として紹介されています。確かに神は偉大な方です。全能の力を持っています。しかし、この力は人間に知られている力ではありません。人間らしく人間のようなものであると人間を基準にして考えますと、人間の間違いと欠点も神のイメージに入ります。だから、いろいろな宗教の場合は、神は最高裁判所の長官です。或いは妬み深いものです。だからそういうわけで、例えば作家とか学者などが信仰を否定します。あるいは笑い物にします。神の代わりに信頼されているのは人間の哲学、科学などです。この代用品の人はいつも人間の偉大さを証明しなければならなくなります。

しかし、神は自分の偉大さを見せる必要はありません。なぜなら神は御独り子イエズスによって神ご自身を示しているからです。

それは生まれた時から十字架上の死と復活に至るまでに言えることです。誕生だけ考えれ

ばイエズスはヘロデ王の宮殿ではなく、羊飼いのところ馬小屋で生まれました。最初から安全な生活は出来ませんでした。現代の難民たちと同じように、イエズスさまの両親は赤ちゃんの命を守るためにエジプトに逃げなければなりませんでした。大人になったイエズスさまはいろいろな問題に出会います。たとえば否定、悪口雑言、裏切り、迫害、裁判、死刑。このような運命はもう既にベツレヘムの時に現れていました。ルカ2, 12の言葉はヒントになります。“あなたがたは、産着にくるまれて、かいた桶に寝ている乳飲み子を見るであろう。これがしるしである。” 王さまの子供が生まれた時には兵隊と医者が最初から王子を守ります。イエズスさまが生まれた時は、マリアとヨゼフ以外にイエズスさまの傍には誰もいませんでした。初めてゲッセマニの園でペトロは刀を抜いて兵隊からイエズスを守ろうとします。十字架につけられた時

イエズスさまは彼らのために祈りました。復活された時にまだ手と足に傷がありました。これによって彼は自分ご自身を私たちに示しました。だからクリスマスを盛大にお祝いするのは神様のやりかたを理解するための第一歩です。第2歩は受難、第3は復活、第4は聖霊降臨。クリスマスは大勢の人々にお祝いされていました。今年のクリスマス・イヴのミサに参加した人々の人数はとても多かったです。それは嬉しいしるしです。その人々のうちにまだ洗礼を受けていない人々も多かったと思います。彼らがわたしたちと出会ったことによって、新しく神のイメージを見つけるように祈っています。その意味で新年おめでとうございます。



